



中大留学生 参加 今春 13 国際交流を

「借り人」(かりびと) 競争で、出番前に確認する留学生たち



の運動会 カ国・地域 推進

4月入学の留学生を対象とした「中央大学国際交流運動会」が5月13日、多摩キャンパスで行われた。13カ国・地域からの留学生16人が参加。総勢86人が大会5種目を通して親睦を深めた。

国際寮・英語学会(学友会文化連盟)・Gスクエア(異文化交流ラウンジ)の3グループの学生による共催で、国際センターが協力した。

同運動会は2017年に始まり、留学生が入学する春・秋の年2回開催されている。今回の運営準備は3月に始まった。

開会式で主催側があいさつし、続いて種目の説明をする。日本語をゆっくり話し、もう一人がよどみない英語で通訳する。日本語、英語と続くアナウンスを聞くと、成田空港にでもいるような気分。日

本語を勉強中の留学生が溶け込みやすい雰囲気を作ろうとする主催側の心遣いを感じられた。

この日集まった留学生の出身国・地域は13。4月以降、すでに親しくなった人もいれば、互いに初対面の人もいたようだ。

8チームに分かれ、応援で来場した国際寮生OBらが飛び入り参加した。

楽しむ留学生

最初の種目は「ジェスチャー

ゲーム」だ。問題(英語)が書かれたボードを見てアクション開始。チームの仲間にボードの表示を答えてもらう。出題は「握手」。手と手を結んだジェスチャーに「シェイクハンド!」で正解。初対面であっても笑みがこぼれるのは同じタイミング。

次の出題「サムライ」では、しばらく考えて「パス」。仲間もボードに近づき、じっと見ては考え込んだ。

第2種目は「しっぽ取り」。お尻に付けた長さ1センチほどのカラーテープを奪い合う。自らのテープを守りながらチームメイトにピンチを知らせる。会場内の声が大きくなった。

第3種目「〇×(マルバツ)ゲーム」は出題が正しいか・間違いかをチームで答える。考えている間は手をつなぐ。そのままの状態、選択した正・誤の各ゾーンへ移動する。

第4種目「^{かりびと}借人競争」は、出場者が出題に添った借り人の手を取っ



出題(右端)を見て、さあジェスチャー開始

支援者の中大OB、 小田眞一氏(1973年商学部卒業)の話

■さらに輩出したい、国際的な人材

「大学や学生が行うこのようなグローバルな交流イベントに賛同し、駆けつけたり、ペットボトルやタオルなどを協賛して下さるOBもいます。このような輪

が広がることによって、オール中央大学としてのブランドが向上し、中央大学から、国際的に活躍する人材がさらに輩出できるようになるものと思います」

■ラウンジに響く拍手

多摩平国際寮では、留学生と日本人寮生2~3人による日本語学習が週に1回ある。ドイツ人男子学生が覚えたばかりの日本語を披露した。

「きょうは〇〇さんと一緒に、ごはんをつくって食べました」

「日本語を話すまでの努力が分かって、感動しました」と花堂寮長。ラウンジに拍手は長く続き、ドイツ人学生は笑顔、スマイル、レッヘルン(ドイツ語で笑顔)。

気難しそうな顔をしているようにも見えたが、いい笑顔も見せてくれたという。

運営スタッフ・横内真生子さん(Gスクエア、法3)の話

■みんな仲良くなった

「こんなに楽しんでもらえるとは思いませんでした。ゲーム中は歓声が多くて、走るシーンでは「そんなにまで…」と驚くほど一生懸命。国際寮生と私たちが呼び掛けした留学生との間に交流が生まれ、会話しているところを見

ました。これを目的にしていたので、すごくうれしかった。みんな仲良くなってもらいたい。1日が終わり、撮影した写真を見て、参加者が楽しい表情だったのが分かりました。運営に携われて良かったです」



Gスクエアで活動中の横内さん

てゴールへ向かう。

最終の「ドッジボール」では、会場がすっかり打ち解けた雰囲気になり、ボールの行方に一喜一憂した。

互いの手を取るゲームが多く、自然とスキンシップができる。友好の輪は徐々に大きくなった。開会式では固い表情だった留学生も閉会式は満面に笑み。記念撮影を待つ間には、おしゃべりの花があちこちで咲いていた。

全5種目が進行する間、留学生の表情を心配そうに見ていたのが多摩平国際寮の花堂柚紀寮長(文3)だ。「楽しんでるかずっと

気になっていました」

帰り際に聞いた、留学生からの一言にそれまで緊張していた気持ちが和らぎ、ほっとしたという。「宿題があるから行けないと言っていた留学生が来てくれて、「楽しかったよ、ありがとう」って」

寮に戻っての夕食(自炊)。韓国からの留学生がマーボー豆腐をつくる、とキッチンに立った。「運動会に参加したみんな食べて、彼が「しっぽ取りが楽しかった。もっと動くゲームがあってもいいよね」って、アドバイスをくれました」

花堂寮長に韓国風マーボー豆腐は辛かったようだが、耳にした合格点の大会総評は甘いスイーツ

だったかもしれない。

中大には毎年800人超の留学生が在籍する。多くが複数ある国際寮で過ごし、日本で知り合った諸外国からの留学生や日本人寮生と時間を共有する。2018年春期メンバーは11カ国・地域からの留学生27人を含む62人だ。

花堂さんには高校3年次に米国留学の経験がある。日本人が少ないと言われるミネソタ州に単身で1年間滞在した。

「私のいちばんの思い出です。いちばん戻りたい場所です」

懸命の英語が思うように伝わらない。もどかしい、さみしい思いを



終了後、記念写真を撮るころはすっかり仲良しに =提供・国際センター

しながらも、最後はエンジョイが上回ったという。

中学・高校時代。両親は自宅を留学生に開放してホストファミリーとなった。留学生を気遣う母親。母には留学経験があった。

「当時は、母をとられたような気がして…」

米ミネソタから戻ると「1人で外国に来た留学生の気持ちがわかりますから、手助けしたい、日本に来て良かった、と言ってもらいたい」と迎える側としての心構えをもてるようになった。

父は海外勤務。母が合流するとき。留守宅に1人暮らしでいるよりは、と国際寮での生活を選んだ。寮生に友人がいて、寮の楽しさを知っていた。

在寮2年目で寮長となった。運動会のほか、各種イベントを毎週のように企画して留学生との交流を図る。

「大学で、たとえうまくいかないことがあっても、寮が居心地のいい場所になるように。いい時間、いい経験、いい思い出に。人生のなかでかけがえのない時間だと思ってもらえたらうれしいです」

当面は初夏のキャンプ場1泊ツアーの準備に忙しい。

先ごろ、中央大学国際寮の2018年版Tシャツをつくった。留学生はいずれ日本を離れる。

「でも、同じ国際寮のTシャツを

着た学生が、世界中にいるなんて、素敵なことですよね」

国際寮には、世界規模の夢がある。



進行を見守る花堂寮長、左はスタッフの小板橋日菜子さん



□中央大学国際寮

留学生と日本人学生と一緒に生活する国際寮。東京都日野市多摩平には3DKを3名でルームシェアする形式の国際寮(定員62名)、また多摩市の聖蹟桜ヶ丘にはワンルームタイプの国際寮(全94室)が

あります。どちらも自炊タイプで、寮生活が国際交流の場となり、日常的に国際感覚や語学力を磨くことができます。(中央大学GUIDE BOOK 2019より)